

(第3種郵便物認可)



生と死をテーマにした映画「おくりびと」がアカデミー賞に輝き、評判となっている。しかし、日々の暮らしの中では、いじめや自殺、殺人など、痛ましい事件が相次ぐ。人の命がこんなにも粗末に扱われるのは、死をタブー視し、非日常的なものとして遠ざけてきたからではないか。

会では年に3回、セミナーを開催し、「患者が直面する死の恐怖」や「死別の悲しみのケア」「死生観の確立」な

死生学会代表

内田 誠さん 67

「死を大切に」伝えたい

メモ 1941年、八王子市生まれ。立川高校を卒業後、東京天文台(現・国立天文台)に11年間勤めたあと、学習塾を営んでいる。東京理科大学理学部卒。次のセミナーは3月21日、八王子市のクリエイトホールで開かれる。参加無料。問い合わせは、内田さん(☎042・624・1355)へ。

どをテーマに話し合っている。「死への不安が少しでも軽減され、ほっとした気持ちになってもらえればうれしい」と語る。

少年時代から、死に対する不安感や恐怖心にとらわれた。最初の出来事は8歳の時だった。仲の良かった4歳下の弟が伝染病にかかり、亡く

なった。野辺送りの鉦の音と、無縁仏の墓に埋葬される光景、そして死の直前に口走った「死んだら、のうのうかんじ(仏様)になるんだ」との言葉が鮮烈な印象として残った。

死への不安が切迫したのは19歳の時。仕事先で仲間と羊の肉を大量に食べ、その翌日から血便が続いた。



「死に直面したあなたに」を書き上げ、自費出版した。反響が大きかったことから、昨年1

月、研究会を発足させた。「死を大事にしない社会は、命を大事にする心をも失わせる。死への心構えができていれば、生きることを真剣に考え、精いっぱい生きるようになる」。そんな思いを多くの人に伝えたいと思っている。

哲学者や宗教関係の本を乱読したが、救いは得られない。苦しみながら、半年かけて見いだしたのは、夢や希望、喜び、悲しみなどすべてを意識から捨て去ること。そうする

ことで、死の不安を乗り越えることができた。

26歳で、ハイデッガーの著書「存在と時間」を手にした。死に臨む人間について書かれた内容が自分の体験や考えと非常に似ていた。

ぜひ、自分なりの死の哲学をまとめようと決意した。仕事に追われ、なかなか進まなかったが、2年前

に3年がかりで「死に直面したあなたに」を書き上げ、自費出版した。反響が大きかったことから、昨年1

月、研究会を発足させた。「死を大事にしない社会は、命を大事にする心をも失わせる。死への心構えができてい

れば、生きることを真剣に考え、精いっぱい生きるようになる」。そんな思いを多くの人に伝えたいと思っている。

(鈴木英二)